
熱砂の超巨大移動要塞ヴィーナス

ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

熱砂の超巨大移動要塞ヴィーナス

【Nコード】

N1544Z

【作者名】

ヒイロ

【あらすじ】

不治の病にかかっていた少年が人体冷凍保存で未来へ……しかし、未来は過酷な世界になっていた。

少年はどのように生きていくのか！

アンドロイドあり、モンスターあり、そして男のあこがれ戦車あり！もちろん、ハーレムだつて入れちゃいます！

果たして、少年はいちやらぶできるのか！

プロローグ（前書き）

初めてなのでお手柔らかにお願いします。

プロローグ

西暦2100年、在日米軍の度重なる不祥事に伴い日本政府は在日米軍の排除を決定する。

これを受けてアメリカが抗議行動を行うが、ある日本人の演説により反発運動が各地方で起こり、在日米軍を撤退させた。

撤退した基地は自衛隊の基地に再利用され軍事拡大を行うことに成功する。

在日米軍の排除を成し遂げる事ができた功労者の

「不知火 大蔵」が軍部の最高責任者へ就任を果たす。

この物語は「不知火 大蔵」の息子である

「不知火 和也」が織りなすファンタジー・・・なのかな・・・

雪がちらつきはじめている季節の

とある病室で医師からある病気の告知をされている家族がいた。そう主人公の「不知火 和也」と両親である。

「あなたの病気は現代の科学では治療することができません。

また、これから治療を行える可能性は極めて低いと思います」
医師が沈痛な面持ちで話はじめた。

「息子は・・・息子は・・・まだ、18なのに・・・」

和也の母「佐代子」が涙を流しながらつぶやく

「佐代子・・・」

大蔵が佐代子の肩に手をおき慰めように引き寄せる。

「父さん、母さん・・・前からそうじゃないかと思っていたよ・・・」
ため息をつき、和也は話を続ける。

「大学を飛び級で卒業し大学院で博士号もとれた。

父さんの軍部で訓練と戦略、戦術も学ぶことができた。

濃密な人生だったと思う・・・それなりに良い人生だったよ・・・」
明るい声で和也は話した

「和也・・・私は・・・私は!！」

佐代子は興奮して話す。

「佐代子! 落ち着きなさい! 先生・・・家族だけにして頂けますか・

」

大蔵が佐代子に強く言いきかせる

「わかりました・・・私はナースステーション近くにいますので終わりでしたら

お声をおかけ下さい」

医師はそういい、病室を出て行った

「和也・・・よく聞きなさい。佐代子も興奮せずに最後まで聞くように」

唐突に大蔵が語り始める

「私は軍部の最高責任者としてあるプロジェクトを行っている。

いわゆる人体冷凍保存といわれるものだ」

「和也の病気は現在の医療では治せない。しかし、未来で治せる可能性が

あるかもしれない。私はこれに掛けたいと思う。和也はどうしたい?」

和也は衝撃を受ける。確かに未来なら治せるかもしれない。でも・

「父さん・・・それは確実に治るかはわからないよね?」

「確かに可能性は低いかもしれない。でも、0%ではない。どうせ治らないなら

かけてみてはどうだろうか。佐代子はどうだろうか?」

「私は・・・私は・・・和也がずっと苦しむならば、それにかけたい・・・」

「母さん・・・俺の為に考えてくれる両親がいて本当にうれしいよ。」

分かった！父さん、俺もそれで生きることにかけてい！」

「わかった。先生には伝えておく。後で軍部のものがある施設に運ぶから」

「そこで行おう！準備は大丈夫か？」

「俺はいつでも平気だよ！」

「では、すぐに手配を行う！佐代子は先生に連絡を」

「わかりました。先生には私から話を通します」

大蔵と佐代子は急いで病室を出て行った。

病室に静寂が訪れたのもつかの間・・・ノックの音が聞こえる

「どうぞ・・・」

和也はノックを聞いて答えた

「失礼します。軍部から参りました、斉藤 正治と申します。

すぐに移動を開始したいんですが大丈夫でしょうか」

「俺は構いません。持っていくものもないですし、服もこのままで良いのならば」

「問題ありません。では、ご案内します」

病室から病院の出口へと歩き始める。

「これから移動する場所は特殊施設になりますので

関係者以外は入れません。施設のものには触れないでください」

「わかりました。ここから近いのでしょうか」

「はい、入り口で専用の車があります。そこで投薬を行います」

「わかりました。」

病院の入り口に着くと大きなワゴン車が止まっていた。

「どうぞ、お乗りください」

正治は素晴らしい、車の扉を開けて和也を中へ促した。

「わかりました。宜しくお願い致します」

和也は車に乗りこむと

「ああ、そうでした。これが例の薬です。水は横にあるので、お飲みください」

「あ、わかりました。では・・・」
和也は薬を服用し・・・そして意識がなくなった

プロローグ（後書き）

メタルサーガなどの設定が入りますが・・似ている世界観と設定と
思っています。また、更新などは遅いと思います。要塞は・・・次
の予定です。

第1話「目覚めたら美女？」（前書き）

すみません・・・要塞までいきませんでした。

まあ、ヒロインは出せたのでお許しただけねば・・・

第1話「目覚めたら美女？」

コッコッコッコッコッコッコッコッコッコ

無人の廊下を靴の音が響く。

「やっと完成しました・・・」

これがあればマスターのご病気も治ります」

ロングの赤い髪をしたスタイルの良い美女がつぶやく。

「しかし・・・思ったよりも時間がかかってしまいました。

早く人体冷凍保存室に向かい蘇生を行いませんと」

コッコッコッコッコッコッコッコッコッコ

「ここまで広いと急ぐときは困り者ですね・・・」

何か手を考えませんと・・・マスターにご負担をかけてしまってもしれません」

コッコッコッコッコッコッコッコッコッコ

「あ、ここです。毎日、寝顔を覗いていましたから、

場所は絶対に忘れません。ああ・・・とうとう・・・うふふふふ」

人体冷凍保存室とプレートに書かれている部屋の前で

美女が怪しい微笑を浮かべる

「では、失礼します。マスター」

プシューと音がしてドアが自動で開く。

そこには大きい部屋にも関わらず

部屋の中央に一つだけガラス製のカプセルが安置されている

「マスター、お目覚めの時間ですよ」

美女はガラス製のカプセルに近づくと中を覗き込む

「マスター、お待たせしました。もうすぐですよ」

ガラス製のカプセル近くにある透明なプレートに手をかざして何かを入力し始める。

「さあ、マスター・・・」

ガラスのカプセルから白い冷気が噴出し

静かに・・・静かにカプセルが開いていく。

「愛しのマスター、お目覚めください」

美女が怪しい微笑を浮かべガラス製のカプセルを見つめた。

カプセルが全て開ききつたと同時に男性が目を開いた。

「えっ・・・ここは・・・」

男は目を覚まし上半身を起こした

「おはようございます。マスター」

「えっ、き、君はいつたい・・・」

美女の突然の挨拶に男性は驚きながら話す。

「申し訳ございません。私の名前はC I P - 99型と申します。

和也様でよろしいでしょうか」

「えっ？確かに俺は和也だけど・・・どういうこと??」

「私はアンドロイドです」

「あ、ああああ、アンドロイド??えっと人間ではないということかな？」

どこからどう見ても、人間しか見えないんだけど・・・」

和也がC I P - 99型を頭の前から足までを見る

「はい、私はアンドロイドで間違いありません。

ですが感情回路が組み込まれておりますので

ほぼ人間と変わりはありません」

「えっ、感情回路??」

「はい、人間と同じように喜怒哀楽ができるように組み込まれた回路です」

「でも、データ通りに動くだけでは・・・」

「いえ、データに基づいて表現されるわけではなく、

人との生活でつかさどったものとなります」

「なるほど・・・ってそれなら違うところはあるのかな?」

「人間と違うところですね。子供を生む事ができない事と

身体能力や知性、記憶力などになります。戦略・戦術・戦闘など

人ではできない行動を行う事が可能です」

「なるほど・・・でも、その名前じゃ呼びにくいよね・・・
CIP-99型ってさ・・・愛称とかはないのかな？」

「マスター、申し訳ございません。私にはそのようなものはありません。」

「そうなんだ・・・では、俺がつけてよいかな？」

「マスターが名前を下さるんですね。お願いいたします」

「では・・・うーん、アテネなんてどうだろう？」

「アテネですか・・・わかりました。これからアテネと名乗らせて頂きます」

アテネからピーピーと機械音になる。

「な、なんだ・・・」

「名前を頂きましたのでマスター登録を行います。大変申し訳ございませんが

マスターの粘膜を頂きたいと思います」

「え???どういうこと・・・」

和也が話している途中でアテネが突然顔をよせキスを行う

「なななな・・・なに!!!???」

「粘膜登録を完了しました。正式にマスター登録完了です」

「え、あ、へ・・・」

「突然で申し訳ございません。正式に登録を行うには

粘膜登録を行う必要があります。キスが一番早く行えますので」

「そ、そうなんだ。で、でも、キスなんていきなり・・・その・・・」

「マスターとキスを行うのに躊躇なんてありませんよ。」

「マスターは和也様だけですから」

「そ、そうか・・・でも、びっくりするからさ」

「わかりました。今度からマスターに確認をとりキスを行いますね
アテネが怪しく微笑んだ

「い、いやそうじゃなくて・・・って、そうだ！聞きたいことがある
んだけど・・・」

「はい、なんででしょうか？マスター」

「あ、その前に、マスターは俺だけってどういうことかな？」

「それはマスターがマスターだからです」

「え？どういうこと？」

「それに関しましては、マスターの病気の治療を行ってからでもよろしいでしょうか」

「あ、ということは俺の病気が治るようになったということかな？」

「はい、こちらを投薬すれば完治します。まずはこちらをお飲みになつた後に」

詳しいご説明を行いたいんですがよろしいでしょうか」

「わかった．．．これで病気は治るのか。父さん、母さん、賭けにはどうやら勝てたらしいよ」

和也はそうつぶやきアテネから薬を受け取り飲んだ

「マスターその薬は即効性なので飲んですぐに効果がでると思います。」

ですが、難点は眠くなる事です」

「え．．．ああ．．．だから．．．」

和也は薬を服用し．．．そしてまた意識がなくなつた

「お休みなさいませ．．．マスター．．．」

アテネが怪しく微笑んだ

第1話「目覚めたら美女？」（後書き）

ふむ・・・なんかよく意識がなくなる主人公になってしまいました・
・
誤字とかあるかもしれません。気がしないだけでいただけるとありがたいです。

12/6 修正

第2話「俺は一体どこにいるんだ？」（前書き）

要塞の事は出せたんだけど、説明まではいけなかった・・・

第2話「俺は一体どこにいるんだ？」

「う・・む・・」

大きなベットで寝ている和也が寝返りをうつた

「マスター・・・お目覚めですか？」

「う・・・えっ・・・あ・・・夢ではなかったのか・・・」

和也は目を開きまわりを見渡した

「マスター・・夢から覚めていないのですか？」

でしたら、目覚めのキスが必要ですね」

アテネは怪しい微笑を浮かべながら和也の顔を近づけて・・・

「のわ!!!ア、アテネ!!!起きた!!!起きたから!!!」

もう大丈夫だよ!!!ほら!目が覚めているからこんな事できる!!!」

あわてて和也はベットから起き上がりジャンプしはじめる。

「チィ・・・そうですか。おはようございます。

マスター、体の調子はどうでしょうか」

「えっ、今、舌打ちしなかった?？」

「何のことでしょうか。マスター・・耳は大丈夫でしょうか。

やはり精密検査を行いませんと。解剖とが必要でしょうか」

「か、解剖!!!いやいやいや!!!俺は元気だよ!!!まだ起きたばかりだから

りだから

寝ぼけていただけだよ!!!うんうん、そうだよ!きつと!!!」

「そうでしたか。では、精密検査は今度にしますね」

アテネは怪しい微笑を浮かべる。

「今度・・・いやいや、精密検査は良いから!本当に!!!」

「分かりました。問題ないようでしたら良いのです。

ところで、体の調子は大丈夫でしょうか？」

「ああ、体のたるさなど特にないな・・・問題ないと思うよ」

和也は腕を動かしたら首を動かしたりして答えた

「そうですか。見た限りでは問題なさそうですね。」

では、マスター大変申し訳ございませんが
脈を取らせて頂いてもよろしいでしょうか」

「ああ、問題ないよ。お願い」

アテネは和也の手をとり、脈を確認する

「マスターの脈を見る限りでは、健康そうですね・・・」

アテネは笑顔で和也に向けると同時に和也の手を自分の方に引つ張る

「のわ!! な、なにするん・・・」

アテネは和也の唇を自分の唇と合わせ、キスを行う

「う・・・ん・・・マスター、ご馳走様です。健康そのものです」

「な! なんでアテネはキスをいきなりするんだ!!」

「もちろん、マスターと愛を・・・健康を確認するためには粘膜を

調べる必要があります、申し訳ございません」

「えっ、今、愛をとかわいわなかつた?」

「マスター、やはり耳が・・・解剖の準備をいたしませんと」

「いやいやいや、アテネ! 申し訳ない!! 空耳だった!! うん!!

空耳!!」

「そうですか・・・残念です・・・」

「アテネは俺を解剖したいのかい・・・勘弁してほしいんだけど・・・

」

「マスターを解剖したいわけではありません。

全てを受け入れただけです。そう、マスターの全てを」

「え、え、え・・・ま、まあ、なんだ・・・そ、そうだ!!」

「ここは、いつたいどこなんだい?」

「マスターに、ご説明を行っておりませんでしたね。

大変申し訳ございません。ここはヴィーナス内部、マスター専用室

となります」

「???? ヴィーナス????」

和也はアテネのいわれたことが理解できなかった

「はい、マスター。超巨大移動要塞ヴィーナス、いわゆる軍事基地
です」

「軍事基地・・・つまり、父さんの関係なのかな??」

「はい、お父上である、大蔵様のご命令で完成された、和也様の為の要塞となります」

「俺の為の??いつたいたいどういう事なんだ・・・」

父さんはどのように考えて俺にこのようなものを・・・

いやいや、考えても仕方ないか。聞いてみればわかる事だしね。

アテネ、父さんや母さんはどこにいるのかな？」

「大蔵様と佐代子様はお亡くなりました」

「えっ・・・どういう事・・・父さんと母さんが亡くなったなんて

嘘でしょう・・・アテネ・・・」

和也はショックを受けつつもアテネに聞き返した

「申し訳ございません。大蔵様と佐代子様はお亡くなったのは真実でございます」

アテネは悲しそうに和也の質問に答えてた

「そんな・・・じゃあ・・・俺はどれくらい眠っていたの??」

啞然としつつアテネに質問を返す

「マスターが人体冷凍保存をされてから2000年ほど立っております。

現在は西暦4100年となります」

「は????え・・・つまり、俺は2000年眠っていて、そこまで薬が開発できなかつたということかな??」

和也は啞然とした表情でアテネに問いかける

「はい、正確には薬の開発が行えない状態が続きまして、開発自体を後手にまわさないといけませんでした」

「開発が後手に・・・つまりイレギュラーな出来事が起こったと言
う事が・・・」

「はい、マスターのご想像通り、ある出来事が起きたために
後手にまわさないといけませんでした」

「ある出来事か・・・それは気になるな。」

アテネ、いったいどんな事が起きたんだい？」

「それは……」

アテネは2000年の間に起きた

驚くべき事実を語り始めようと口を開いた……

第2話「俺は一体どこにいるんだ？」（後書き）

次回は和也の寝ている間に起こった事。

しかし、和也のいちゃぶまで長い・・・

早くハーレムにしたいのにな・・・

第3話「寝てる間になにがあった？」（前書き）

ふむ・・・説明は難しいですね・・・
分子とかは流してくださいね・・・

第3話「寝てる間になにがあった？」

「マスターが人体冷凍保存をされてからすぐでしょうか」
アテネは前置きのように言いはじめ続ける

「マスターもご存じのとおり、地球温暖化問題で
二酸化炭素をどのように削減できるかを
各国の代表が集まり会議を行っております。

しかし、削減の重要性をいくら訴えても
中国がそれを許さず、自国の要望のみを言い
まったく協力を行いませんでした」

アテネはため息を吐きながら続けた。

「しかし、日本人研究者『栗林 悟』氏が
ある研究を発表しました事により、
新エネルギーが開発されました」

明るいついでアテネが話す

「新エネルギー？それって温暖化と、なにか関係あるの？」

和也はアテネに問いかけた

「はい、これは二酸化炭素を使用したエネルギーです。

二酸化炭素を一つの器コップに閉じ込め

分子の活動を促すことによってエネルギーを発生させます。

詳しく説明を加えますとこのエネルギーは分子を

電気信号により活動を促し少しの信号で莫大なエネルギーを
生み出す事に成功しました」

アテネは一度話を切る。

「このエネルギーの開発により二酸化炭素の活用法が生まれ
大量に二酸化炭素のみを取り出す事で地球温暖化の抑制につながり
ました」

「なるほど・・・二酸化炭素のみ・・・酸素は外にだすのか・・・」

「はい、この画期的なエネルギーの開発で地球温暖化を抑制する事

に成功しました」

ここでアテネは和也と目をいつそう合わせる

「栗林氏の研究で発見されたエネルギーであるこれを

『永久ドライブ・栗林』通称『EDK』となづけられました。

これにより全てのエネルギーを

EDKに切り替える事が各首脳会議で決定されました」

アテネは下を向いて話し続ける

「しかし、安易に永久的にエネルギーを生み出すことができる

EDKが開発された事により、各国で利権争いが勃発する事になりました。

また、この時期に以前から進められていたアンドロイド開発の目処がつき、

エネルギーを小型化できるEDKを搭載させる事で起動に成功しました」

アテネが笑顔を浮かべた

「しかし、アンドロイド開発が成功したことで

大規模な世界戦争が行えるようになり

各国でアンドロイド同士での戦争が行われるようになりました」

「そんな中でアンドロイドを大量にかつ遠隔に操作する為に

アメリカの研究者リステインが発明した

アンドロイド遠隔装置と人工知能を兼ね備えた、

ジャステイスが発明されました。

ジャステイスの導入により、アメリカが一挙に戦闘地域を広げる事に成功します」

アテネは悲しそうな声を出しながら続ける

「アメリカはさらに戦闘地域を広げようとアンドロイド達の総括システムである

ジャステイスに命令を下したところ

ジャステイスがその判断を否定し独自の行動を行いました」

「ジャステインは人間がいるかぎり地球は守られないと

判断を下し、アンドロイドたちに人間を攻撃するように命令を下しました。そうです・・・暴走を始めたのです」

「ジャステイスを破壊する為にアメリカ軍部が動き攻撃を始めましたが」

人型アンドロイド以外に殺人マシン・バイオ兵器・生体兵器などをジャステインが開発し生産し始め、それを使い抵抗をしいはじめた為、アメリカ軍部の作戦攻撃が失敗に終わりました」

「ジャステスはこれを機に衛星を通じて

各首脳国のコンピュータに侵入、コピーを行い

地球上の人間に対して攻撃をはじめました」

「この暴走により人類の50%が死に絶え

生き残れた人類はジャステイスに侵入されていない

コンピュータや兵器を使用し、

なんとか拠点になる生存圏を守る事ができました」

「その拠点であるシティを安全に行き来できるように

また、ジャステイスが生産している敵に対抗するために

ハンター協会が設立されました」

「ハンター協会か・・・どこでもあるのかな？」

「というか・・・ゲームみたいな・・・」

「はい、そうです。確かにゲームみたいですが真実です。

ハンター協会は各シティにあります、

主に護衛やモンスター・危険性が高いモンスターに賞金を

かけてそれを討伐する事でゴールドを得る仕事となります」

「なるほどね・・・」

「以上が世界情勢となります。現在はハンター協会で

シティは守られています、いつジャステイスが

動くかわからない状態です」

「ジャステイスか・・・なるほど・・・流れは大体わかったんだけど

肝心の今乗っているヴィーナスの事が語られていないんだけど」

「もちろん、これからですよ。マスター、せつかちは女性にはモテ

「ませんよ」

「ほっといてくれ！」

アテネは微笑を浮かべヴィーナスの事を語り始めようとさらに話を続けようと口を開いた

第3話「寝てる間になにがあった？」（後書き）

世界情勢はかけたかな・・・

つぎはやつと要塞だ！！

ヴィーナス！！はやく・・・ハーレムにしたい・・・

12/8 修正

12/12 修正 黄金拍車 様、ご指摘ありがとうございます

第4話「要塞でかくない？」（前書き）

なんとかかけた・・・

第4話「要塞でかかない？」

「では、超巨大移動要塞ヴィーナスに関してのご説明をいたしますね」

アテネは笑顔で話しかける

「おお・・・やっとか・・・」

「お待たせしまして申し訳ございません」

まずはマスターがなぜここにいるかの説明からさせていただきます」

「病院から出た後にマスターはすぐに

このヴィーナスに運ばれて処置を行いました」

「えっ、薬を飲んで意識がなくなっただ後にな？」

「はい、そうです。もともとヴィーナスと人体冷凍保存の開発は

佐代子様の指揮のもと行われていました」

「・・・母さんの・・・」

「そうです。人体冷凍保存技術はすでに開発を完了しておりましたが

超巨大移動要塞ヴィーナスはコア部分などの

重要部分のみしか完成しておりませんでした」

「しかし、マスターのご病気が現在の医学では

治療を行える可能性は極めて低いと判明した事をきっかけに

急遽、人体冷凍保存室の完成を先行して行う事を決定しました」

「つまり、そこに俺が入ったということかな？」

「はい、その通りです。ヴィーナス内部に

人体冷凍保存室を設置を最優先し、内部の開発は

全ての処置が終了した後に行う予定に変更されました」

「また、人体冷凍保存室の制御と管理、

超巨大移動要塞ヴィーナス開発の指揮と

マスターの護衛を行う為に

日本で初めて開発されたアンドロイドである私が配備されました」

「なるほど、アテネが・・・」

「人体冷凍保存の処置が終了した後

停止していた超巨大移動要塞ヴィーナスの開発を再開しましたが
ジャステイスの暴走により開発を一時中断し

大蔵様と佐代子様は迎撃と指揮を行うために出立されました」

「父さんや母さんは戦いに出たのか・・・父さんたちは生き残った
のかな？」

「大蔵様と佐代子様の指揮のおかげで日本人はかなりの数、
生き残ることができたそうです。ただ・・・」

「ただ・・・やはり、父さんや母さんは・・・死んでしまったんで
すね・・・」

「はい・・・敵の数が多く、自衛隊だけでは民衆を逃がす事で
精一杯だったようです・・・」

「そうなんだ・・・でも、父さんと母さんらしいよね・・・」
和也は下を向いて悲しそうな声を出した

「でも・・・なぜ、この要塞は大きいのかな？重要部分しか
開発できていなかったはずなんじゃ・・・」

「それはですね、私が設計図を基に

姉妹アンドロイドを指揮し完成を行いました」

アテネは嬉しそうに答えた

「あれ？？でも、ジャステスがアンドロイドを統括していたのでは
・・・」

和也は疑問を口にした

「それに関しましては感情回路を組み込む事で

アンドロイドが独自の判断が行える為に

外部からアクセスされる事はありませんでした」

「ジャステイスは外部システムを通じて制御を行う為、

感情回路が組み込まれていますと統括されることもありません」

「もちろん、姉妹アンドロイドとヴィーナスにも感情回路が

組み込まれている為、制御されることはありません」

「なるほどね・・・感情回路ってすごいんだね・・・」

「はい、このシステムは佐代子様が開発したものです」

「母さんってすごかったんだな・・・」

「この感情回路は戦争にアンドロイドを利用するのではなく人間と共に生きてほしいと願いを込めて開発されたそうです」

「母さんらしいや・・・」

「私も感情回路があるおかげでマスターと

このように楽しく話せるのでとても嬉しいです」

「アテネ・・・俺もアテネと話せて嬉しいよ」

「マスター・・・このときめきは愛でしょうか！今すぐキスをしませんと！！」

いや、ベットへ！！」

アテネは体をくねらせ、大きな胸で谷間をつくりながら和也へにじり寄って行く

「ちょー！！アテネ！！興奮しすぎ！！落ち着いて！！！！」

「私はすごーく落ち着いております！！」

「まったく落ち着いてるように見えないよ！！深呼吸して！！」

まだ、ヴィーナス内部の説明とか聞いてないし！！！！」

「そのような事は後で！！」

「いやいや、アテネ！！先に！！先にお願ひ！！！！」

「そうですね・・・仕方ありません・・・何がお聞きになりたいのですか？」

「ヴィーナス内部に関してだよ・・・」

和也は冷や汗を拭きながら答えた

「わかりました。では、超巨大移動要塞ヴィーナス内部の説明を行います」

「ヴィーナス内には、開発フロアー、農耕フロアー、

住居フロアー、操舵フロアーなどフロアー別に分かれております」

「まずは開発フロアーですがこちらは兵器から家電まで全て自動で生産されます。

また、アンドロイドやEDKの生産もそこで行われます。

ジャスティスに対抗する為に色々作られていると考えて頂ければ問題ありません」

「なるほどね・・・」

「次に農業フロアーですね。こちらは字のごとく野菜や動物の飼育などが行われています。」

「私たちアンドロイドには関係ありませんが」

「マスターの食事が生産されていると考えてください」

「食料品がそこで作られているのか・・・」

「次は住居フロアーですね。このエリアでは最大5万人まで収容することが可能です。」

「要塞ですので戦う為の兵士もこのエリアで生活することになります」

「そうか、要塞だもんな」

「つぎは操舵フロアーですね。このエリアはヴィーナスの制御室などが含まれます。」

「字のごとくなのでわかりやすいかと思います」

「確かにね・・・しかし、結構大きいね・・・エリア自体はこれで終わりかな？」

「いえ、細かい部分ではまだありますが、」

「たとえば、倉庫や戦車などを止める場所などがあります。」

「ですが、大まかに分けると以上となります」

「なるほど・・・でかすぎだね・・・なんか迷いそうだな」

「マスターが迷うことはありません。私がいつも一緒にいますので」

「えっ、いつも??」

「はい、いつもです。どこでもです。どこまでもです!」

「そ、そう・・・」

「では要塞の説明も終わった事ですし・・・そろそろ・・・」

「アテネは体をくねらせ、大きな胸で谷間をつくりながら和也へにじり寄って行く」

「え、え、え、!なんで寄って来てるの!!!」

「マスター・・・分かってるくせに・・・」

笑顔でアテネが寄って来る

「えっ、え……え!!!」

「ふふふふふ……」

アテネがさらによってきて……そして和也と重なった……

第4話「要塞でかくない？」（後書き）

なんか、難しいですね・・・

アテネがどんどん変になってきた・・・肉食系かな・・・

捕食された和也はハーレムを作れるのか・・・

第5話「やっと部屋からでるのか？」（前書き）

ふむ・・・実はまだ和也専用室から出ていなかった・・・
いつになったら外の世界へいけるのかと
思ってますよ・・・

第5話「やっと部屋からでるのか？」

窓から緩やかな光が和也の顔を照らす

「う・・・うん・・・朝か・・・。は！俺は昨日・・・」

自分の服装を確認する和也

「服に乱れはないか・・・良かった・・・」

和也は安堵のため息をはく

「おはようございます。マスター」

和也の隣で声をかけられる

「へ??？」

驚いた声を和也は出す

「どうしましたか？マスター？」

「い、いや、なんでもないよ。」

ところで何で隣で寝てるの？それに昨日は・・・」

おどおどしながら和也はアテネを見た

「昨日ですか？はあ・・・」

アテネは呆れてため息を吐く

「せっかくマスターと結ばれようと頑張ったんですが・・・」

マスターが・・・気絶するって・・・ヘタレすぎますよ」

アテネは残念そうに話した

「し、仕方ないじゃないか！そ、そんな事経験ないんだから！

ずっと、研究や軍事訓練ばかりやってきたんだからさ！」

興奮しながら和也は話した

「でも、確かマスターには女性の幼馴染がいらっしやいましたよね？

幼馴染と色々経験していたはずなのではないのですか？

朝一番に幼馴染が起こしに来てキスをしたり、

ご飯は全て口元にあーんして食べさせてもらったり、

マスターが幼馴染の着替えている途中でいきなり部屋に入ってきたり、

色々なイベントを経験しているはずなんですが……。

昨日は恥ずかしかつただけなのでしょうか」

アテネは当たり前前のように和也に問いかけた

「何を言ってるんだ！そんな事があるわけないじゃないか！

どこからそんな話がでてくるんだ！！」

「そうなんですか……でも、この本に……」

アテネは胸の谷間から本を取り出す

「ど、どこから出すんだよ！それに何その本！

『幼馴染との付き合い方』入門編』って！

嘘だから！！そんな話はまったくくない！！

というか何でそんな本を持っているんだ！！」

和也は興奮しながらまくし立てた

「佐代子様が参考資料にとおっしゃられました

乙女の禁書保管室にたくさんあります」

「母さんが……というか何を考えているんだ！！

そんな本は全て捨てなさい！！」

呆れ果てて和也は話す

「申し訳ございません。いくらマスターのご命令でも

佐代子様のご指示により参考資料はトップシークレット（禁書）は

処分できません。

他の姉妹アンドロイドも参考資料をもとにデータを入れてありますし

また、マスターでも乙女の禁書保管室がある場所には入室することが

できません」

アテネはきつぱりと和也に言う

「なんでだ？俺の為の要塞じゃないの??」

「佐代子様によれば『乙女の秘密には男性は入れないのよ』との事

です」

「母さん……乙女って……いや、それよりも処分できないとか・

・

いやいや、そうじゃなくて……」

和也はぶつぶつ一人で話し続ける

「マスター、大丈夫ですか？顔色が悪いようですが？」

「いや、アテネのせいでしょ?!」

私のせいですか？よく分かりませんが

大変申し訳ございません。

さて、マスター、そろそろ操舵フロアーへご案内したいのですが」

アテネは首をかしげた後に話した

「えっ、あ、そうなんだ。わかった。行こうか」

和也は正気に戻って答えた

「はい、ご案内したいと思います。」

あ、そうでした、こちらをお渡ししますね」

アテネは腕時計のようなもの和也に渡した

「これは、一体なんなのかな？」

和也はいきなり渡された腕時計を疑問に思いながら腕にはめた

「これは、マスターの現在位置や生命維持確認などが

自動的にヴィーナスへ転送され確認できるようになっております」

「俺が監視されているってかな？」

「いえ、それは違います。マスターの安全を確認するために

必要な処置だと思ってください。ジャスティス対策でもありますの

で」

「なるほどね……」

「もしも、ヴィーナス内で迷った際は青いボタンを押してください。

その装置から地図が表示され行きたい場所へ誘導する事が可能です。

ご利用ください」

「なるほど……広いからね……」

「はい、ヴィーナスははまだ開発が続けられ、拡張されております。

私はマスターと離れることはありませんが、

迷われた際は必ずこれをご使用ください。

また、その装置はマスターの認証が登録されている為

他の方が使用することができません」

「なるほど、盗難防止かな??」

「はい、ヴィーナスに敵が侵入を行う際に使用されると困りますので」

「なるほど、わかった。」

「そういえば青いボタンの隣に赤いボタンがあるけど、これはなにかな?」

「赤いボタンは緊急事態に用のものです。」

常に自動的にヴィーナスへ転送されておりますが敵に遭遇した際の対応ができないかもしれません。

それを防ぐ為の緊急ボタンとなります。

マスターの緊急事態時に押してください!

マスターのもとに誰よりも早く駆けつけます!!

そう!私の愛はマスターだけの物ですので!!」

アテネは和也に詰め寄るように答えた。

「そ、そうか、あ、ありがとう。そういえば、外の様子はどうなっているんだろう」

和也は忘れていた事を思い出し外の様子をアテネにたずねた

「ヴィーナスの前方がガラス張りになっております、

前方部分に操舵フロアーがあります。」

そちらへ来ていただければ今現在の外の様子が分かります」

「なるほど、では案内をお願いしても良いかな?」

「はい、ご案内します。離れないようについてきてくださいね」

「あの・・・俺は子供じゃないから大丈夫だよ・・・」

「ふふふ、そうですね。では、行きましょう」

アテネは楽しそうに和也の腕を組んで歩こうとした。

「えーい、いきなり、どうしたの??」

和也はびっくりして組んでいる腕をはずそうとしたが

アテネの力が強くてはずすことができない。

「マスターがはぐれない様に腕を組んでいきましようね。」

それとも迷子になってミイラになりたいのですか?」

アテネは怪しい微笑を浮かた

「わ、わかったよ・・・」

和也は恥ずかしそうにしながら

和也専用室を後にして

操舵フロアーへと移動をはじめた

第5話「やっと部屋からでるのか？」（後書き）

やっと次回で外の現状が見れます。

まあ、その前に新キャラを出すつもりです。

ハーレムだから出さないとね。

アテネは和也を虜にできるか。

それとも新キャラにもっていかれるか！

それとも作者である私が頭が爆発して暴走するか。

乞うご期待！！

第6話「操舵フロアはまだなの？」（前書き）

昨日はすみません。

それと新キャラは出せませんでした。

新キャラの紹介のみになってます。

第6話「操舵フロアーはまだなの？」

操舵フロアーへ移動しながら和也はアテネに話しかけた

「そういえば、アテネがさっき話していたと思うんだけど
ヴィーナスに感情回路がついているんだよね？」

思い出したように和也がアテネに確認をとった

「はい、ヴィーナスは私が開発された後、

どのフロアーよりも先に開発され組み込まれました。

今まで要塞への感情回路を組み込むという概念がなかった為、

開発と各部門の説得が相当大変でだったそうです。

また、開発や予算捻出でも横槍が入るなど

ヴィーナス自体の研究も遅延したそう。

しかし、佐代子様がヴィーナスに

感情回路を組み込むことを強く推進しておりましたので

強引に開発を進めてヴィーナスに組み込まれることに成功しました」

「母さんは、そこまで感情回路に拘ったのは何か理由があるのかな
？」

「佐代子様は『要塞を争いや戦争だけに使用したくはない。

要塞だつて何かをしてみたいと感じたり、

行動してみたいって思っても良いじゃない』とおっしゃっております
した」

「なるほどね・・・要塞だつて色々と感情を持ってもって事か・・・

戦争や争い事の道具で終わるのはもったいないよね・・・

本当に母さんらしい考えだよな・・・」

しみじみ和也は話した

「佐代子様はとても優しい方でした・・・

私も感情回路があり、とても良かったと心から思います」

「そっか、そう思ってくれているのか。

アテネ、ありがとう。母さんも喜んでくれるよ。」

しかし、アテネがすごく良い子なんだから
ヴィーナスもきつと良い子なんだろうね」

しみじみ和也は話した

「マスター、私は良い子ではなくアンドロイドです。

人間ではないので良い子はおかしいのではないのでしょうか」

「俺からしたらアテネは人間そのものだよ。

喜怒哀楽があり心がある以上

アテネは誰がなんと言おうと俺と同じ、人間だよ」

和也はアテネの目を見ながら訴えるように話しかけた

「マスター・・・ありがとうございます。」

その様に面と向かって愛の告白をしていただきして大変嬉しいです。
マスターお部屋に戻ってベットインしたくなりました。

今すぐに、部屋に戻りましょう！！ええ！！今すぐに！！」

アテネは興奮して和也に話す

「な、なにを言ってるんだよ！！あ、愛の告白って！！

俺はアテネは人間だっていったただだよ！！

落ち着いて！！ね！！アテネ！！お願いだからさ！！」

和也は慌てて、アテネを説得する

「しかし、あのように情熱的に目を合わせて訴えかけられたらたら、
その様にしか思えません。マスターの告白されるなんて・・・」

アテネはうつとりしながらつぶやく

「アテネ、落ち着いてね。深呼吸をしようね」

和也はアテネを落ち着かせようと背中手に手を当てて促した

「ああ・・・マスター・・・抱きしめていただけなんですわね・・・」

アテネは熱にうなされたように顔を赤らめて和也を見つめる

「ち、違うよ！！落ち着いて！！操舵フロアーへ行って

外の様子が知りたいからさ！！お願い！！アテネ！！戻ってきて！！
！！」

さらに慌てて和也はアテネに訴えかけた

「マスター・・・仕方ありませんね・・・では、『あとで』お願いい

たします」

アテネは顔を赤らめながら和也に訴えた

「へ？後で？？いやいや、あとでとかそういうのではなくて……えっと、とにかくその……あの……」

ま、まだ、操舵フロアーにはつかないのかな？？」

慌てながら和也はアテネに尋ねた

「もうすぐつくはずですよ。操舵フロアーに

ヴィーナスのアンドロイドが待機しているはずですよ」

淡々とアテネは答えた

「お、怒ってるのかな……」

和也は小さい声で言う

「私は怒ってなどいませんよ」

アテネは怪しい微笑を浮かべて答えた

「そ、そう……な、なら良いんだけどさ。」

そういえばヴィーナスのアンドロイドは

どのような感じの子なのかな？？」

和也は疑問に思うことをアテネに聞いてみた

「そうですね……会って頂ければ

お分かりになると思いますよ」

ヴィーナスはよく『超巨大移動要塞ヴィーナスは大きいから

管理も大変だよ』とよくぼやいております。」

アテネは和也に答えた

「なるほど……確かにこれだけ広いと大変だよな。」

それぞれのフロアーに行くまでも時間がかかるしさ」

和也は歩いている道のりを見ながら答えた

「確かにマスターは大変かもしれません。」

私達アンドロイドはバーストを使えば

速度アップを行えますのでフロアー移動も苦にはなりません」

アテネは笑顔で答えた

「そうなんだ、速度アップすれば確かに早くつくよな。」

なんとか、俺でも使えるような
早く着く様なものってないのかな？

これじゃあ、アテネに迷惑をかけちゃうしね」
和也はアテネにとうかけた

「私はまったく、これっぽっちも迷惑なんて思えませんよ。
マスターと一緒にいるのは私にとって心の安らぎですから」
アテネは笑顔で答えた

「ありがとう。すごく嬉しいよ。」

アテネにそういつてもらえるのは嬉しいけど
やはり、なんとかしてほしいかもな」

困り顔で答えた

「そうですね・・・エレベーター自体はありますが
廊下部分ではまったく対応されておりません。

それに関しましてはこれからの課題ですね。」

マスターがお目覚めになりましたので
気がついたことがあれば、私におっしゃってください。

できうる限り対応させて頂きたいと思えます」

アテネは和也に優しく話しかけた

「アテネ・・・本当にあいがとう。頼りにしているよ」
和也は笑顔で答えた

「マスターのお力になるのが私の役目です。」

マスターに付き従い、どんな事でもご命令ください！
もちろん、添い寝も・・・それ以上も・・・」

アテネは怪しい微笑を浮かた

「そ、それ以上って！！いや、ないよ！！そんな命令しないよ！！
や、やはり愛し合ってこそできる事だからね！！」

慌てて和也が否定した

「マスター・・・私はマスターを心から愛していますよ。
マスターは私が嫌いですが？」

アテネは上目遣いで涙を浮かべ和也に問いかける

「お、俺はアテネのことは嫌いじゃないよ!!嫌いじゃないから涙を浮かべるのはやめて!!!」

和也はドキドキしながら答えた

「嫌いじゃない・・・好きって事ですね。嬉しいです」

アテネは怪しい微笑を浮かべた

「い、いや・・・あの・・・その・・・」

あ!!ドアが見えてきたけど、あそこがそうかな?」

和也はごまかすように答えた

「チィ・・・はい、あそこから操舵フロアとなります」

悔しそうにアテネは答えた

「今、舌打ちしたような・・・」

和也はつぶやいた

「マスター・・・耳は大丈夫でしょうか。

やはり解剖しましょうか・・・」

アテネは和也をみながら答える

「い、いや!!気のせいだよ!!うん!!気のせい!!

ほら、早く行こうよ!!ね!!」

和也はドアへ走っていく

「あ、マスター!!待ってください!!」

操舵フロアのドアの前についた

「では、マスターからどうぞ」

アテネは和也に先に入るように促した

「では、アテネ。先に入るね」

プシューと音がして操舵フロアのドアが開き

和也とアテネは中にはいつていった

第6話「操舵フロアはまだなの？」（後書き）

あああ・・・新キャラ出せなかった。

ただ、出すフラグは立てたから

次回では出せそうです。

感想がありますと

モチベーションがあがるのでよろしくお願いします

12/12 修正 黄金拍車 様、ご指摘ありがとうございます

第7話「ここは操舵フロアーなのか？」（前書き）

遅れてすみません。

着々と文章の量は増やしていけてますが

風邪をひいてしまったため更新が遅れております。

申し訳ございません。

第7話「ここは操舵フロアーなのか？」

「おお、ここが操舵フロアーか。

かなり広いね・・・ここだけでも迷いそうだよ」

和也は周りを見渡しながら話す

「マスターのおっしゃられる通り広さはだいぶあります。

ご案内するためにそろそろヴィーナスが来るはずですが・・・」

「そうなんだ！ヴィーナスに会えるのか！楽しみだな」

アテネに笑顔で話をしていると声をかけられる

「お兄ちゃんは誰かな？」

和也はいきなり話しかけられた

「えっ??？」

和也は振り向いて声をかけた人を見る

「えっと、俺は和也っていうんだけど・・・君は？」

驚きながら声をかけた少女に和也は問いかける

「あ、和也お兄ちゃん、目が覚めたんだ。ヴィーナスはヴィーナス

だよ」

ヴィーナスは笑顔で声をかけた

「君がヴィーナスなんだ。思っていたよりも・・・」

和也はびっくりして話す

「思っていたよりも小さいって思った？仕方ないよ！佐代子様が

『要塞は大きくても感情回路を持っている小さいアンドロイドの方が

ギヤップがあり和也にはよいでしょう』って言われたんだから！

ヴィーナスだって他のアンドロイドみたいに大きい方がよかったの

に！」

ヴィーナスは和也に悔しそうに答えた

「俺はかわいいとおもうよ？その姿でさ。ヴィーナスは自信を持つ

た方がよいよ」

和也は優しくヴィーナスに声をかけた

「あ、ありがとう・・・お兄ちゃん・・・」

ヴィーナスは顔を赤くして答えた

「・・・しかし・・・母さんは俺をなんだと思ってるんだ・・・ギヤップとかさ・・・俺はそんな風に見られていたのか自信がなくなるよ・・・」

それに何でアテネやヴィーナスは一部分が・・・その大きいんだろう・・・

・・・

和也は小声で聞かれないように答えた

「マスター、それはですね。佐代子様が

『女性の胸が大きいと母性本能が働くじゃない』とおっしゃられていました」

アテネは和也の小声に的確に答えた

「な、なんで、聞こえたんだ！！聞こえないように言ったのに・・・」

「

赤面しながら和也が答えた

「マスターの声を聞き漏らすなど、ありえません！！愛ゆえにです！！」

アテネは力強く答えた

「そ、そう・・・あ、ありがとう・・・」

和也はつぶやくように答え、そして心に誓った。

これからは声に出して言わないように気を付けようと・・・

「と、とここでこの要塞がヴィーナスで

アンドロイドもヴィーナスだと同じ名前だから

どちらを指して呼んでるかわからなくなっちゃうんだけど・・・

アンドロイドのヴィーナスには愛称とかはないのかな？？」

誤魔化すように和也は問いかけた

「そういうのはないかな。特に不便に思ったことがないしね！」

ヴィーナスは笑顔で答える

「私もマスターにアテネという名前を

つけていただくまでありませんでした。

愛のある素晴らしいお名前を頂けて大変うれいす」

アテネは嬉しそうに話す

「そ、そうか・・・アテネが喜んでくれるなら嬉しいよ」

和也は驚きながら嬉しそうに答える

「そうなんだ。お兄ちゃんがアテネお姉ちゃんに名前をつけてあげたんだね！」

ヴィーナスもアテネお姉ちゃんみたいに可愛いお名前がほしいな！！

お兄ちゃん！ヴィーナスに名前をつけてよ！！」

ヴィーナスは和也に笑顔でお願いをした

「そうだな・・・ヴィーナスが元の名前から・・・

うーん、どうしようかな・・・」

やっぱり単純だけど愛称だからヴィーちゃんとかどうだろうか？」

和也は悩みながら答える

「ヴィーちゃんか・・・うん！！いいよ！！ありがとう！！

でも、お兄ちゃんにはヴィーって呼び捨てにしてほしいな！！

その方がお兄ちゃんとすごく身近に感じれるから！

だめかな？？お兄ちゃん？？？」

ヴィーは上目遣いで和也に問いかけた

「い、いやいや、わかったよ！これからはヴィーって呼ぶね！！」

和也は慌てながら答える

「よかった！お兄ちゃんに呼んでもらえるとすごく暖かくなるから

！！」

ヴィーは嬉しそうに答えた

「ヴィーナス。私も愛称でお呼びしてもよろしいでしょうか？」

アテネは割って入るように話かけた

「うん！アテネお姉ちゃんもヴィーの事をヴィーと呼んでほしいな！！」

ヴィーは嬉しそうに答えた

「わかりました。これからもよろしくお願いいたします。ヴィー」

アテネは笑顔で答える

「よかったな！アテネ！それと、改めて二人ともよろしくね！」
笑顔で和也が答えた

「はい！！！」

アテネとヴィーは答えた

「あ！お兄ちゃん！！ヴィーとマスター登録しないと！！
お兄ちゃんのヴィーをちょうだい！」

ヴィーは和也をおもいつきり自分にひっぱり寄せる

「わ、わあ……い、いきなり、なにをす……」

和也は引つ張り寄せられ、ヴィーの唇と唇がくっつく

「……ん……ちゅう……」

ヴィーは和也の唇から口を離れた

「な、なななな！！！！何をいきなり！！！！」

和也はかなり驚いて慌てながら答えた

「うんうん！！これで粘膜登録を完了したよ！！」

お兄ちゃんと正式にマスター登録完了だね！！」

ヴィーは嬉しそうに答え、話を続けた

「ふふふ！！やったー！！ヴィーはこれでお兄ちゃんのものだよ！

！！」

ヴィーは本当に嬉しそうに答えた

「アテネもそうだったんだけど、なんで、いきなりキスなんだよ……

・

しかもいきなりだし……それに毎回引つかかるなんて……

俺ってやつは……警戒心がないのかな……」

和也は一人でぶつぶつ話し続ける

「ヴィーと登録するの嫌なの??」

ヴィーは悲しそうに言った

「い、いや、そんな事はないけど……その……なんていうか……

」

和也はヴィーに慌てながら答え、さらにぶつぶつ言いはじめた

「嫌じゃないなら本当に良かった！！」

でも、チューが手っ取り早く、粘膜登録が完了できるし、お兄ちゃんとチューするのは別にいやじゃないから！
むしろお兄ちゃんとたくさんチューしたいし！！」

ヴィーはすごく嬉しそうに答えた

「マスター、私と登録した際に少し説明を行いました
が粘膜登録はキスが一番早く効率的です。」

私はマスターとキスするのは大変喜ばしい事です。

もしも、ヴィーとのキスを行った事が嫌と言うならば、

改めて私とキスを行いましょーう！！ええ、それがよいですね！！」

アテネはぶつぶつ言っている和也を抱き寄せて唇を重ねる

「う・・・んう・・・むちゅう・・・」

和也はいきなりアテネがキスをした為、びっくりする

「マスター・・・お慕っています・・・」

アテネは怪しい微笑みを浮かべながら答えた

「あー！！アテネお姉ちゃんばかりするいよー！！ヴィーもしたい！！」

ヴィーは和也とアテネに頬を膨らませながら伝えた

「い、いや、あ、そ、その、え、あー！！そうそうー！！ヴィーに聞き

たいことがあつたんだよ」

和也は慌てながら、なんとか誤魔化そうとヴィーに話しかけた

「うん？？お兄ちゃん？なにかな？？」

ヴィーは首をかしげながら和也に聞き返した

「マスター・・・誤魔化しましたね・・・相変わらずですね・・・」

アテネは和也を見ながら小声で言った

「あ、あのね・・・ヴィーナスはなぜ、ジャスティスに攻撃されな
いんだ？」

ジャスティスがモンスターなどを今だに生産しているんだよね・・・
そんな状態にも関わらず、このヴィーナスは攻撃されているように
は見えないんだけど・・・」

和也は疑問に思っている事をヴィーに尋ねた

「なるほど！確かにお兄ちゃんは起きたばかりだし、その辺はまっ

「たく分からないよね！」

「ヴィーは笑顔で話す

「ああ、だからすごく疑問に思ってたさ！内部に関してはある程度は聞いたけど、

外に関してはあまり詳しく聞いてなかったからさ」

和也は首をかしげながら答えた

「うんうん、分かった！ヴィーナスがなぜ、襲われないかをね！」

ヴィーは自慢するようにさらに話を続けようと口を開いた

第7話「ここは操舵フロアーなのか？」（後書き）

なんとか新キャラ登場。

妹活発キャラですね。

ちゃんと表現できているとよいんですが。。。

次回はなぜ、この要塞が襲われないかと外の様子を書くつもりです。よろしくお願いします。

12/14 修正 つに。様 ありがとうございます

第8話「この要塞すくくない？」（前書き）

なんとか更新・・・短いかな・・・

第8話「この要塞すくくない？」

「ヴィーナスがなぜ攻撃をされないかというよね！」

実は外敵に見つからないようにステルスシステムが使用されているんだよ！

お兄ちゃんも良く知ってると思うけど、

むかしに、アメリカが戦闘機に搭載していたりしていたよね！」

ヴィーは得意げに話す

「なるほど、アメリカがそういつたのを開発していたね。

確か爆撃機とかにもつかわれたんだっけな」

和也は思い出しながら話す

「うん、それだと思うよ！」

あれは、電波の反射、赤外線放射、地球の磁力線の変形、

音響的被探知、視覚的発見の抑制させるものなんだけど、

ステルスシステムはそれ以上に人間自身にも効果を及ぼせるんだ！

そこに物があるはずなのに無いように感じてしまうという機能と言

えば分りやすいかもね！

人間の感覚器官にも効果があるから生物兵器に見つからないしね！」

ヴィーはさらに得意げに話を続けた

「それは本当にすごいな！！ある物が無いように感じるか・・・

ふむ・・・でもさ、それだと俺にもわからないんじゃないかな？」

和也は疑問に思いヴィーに尋ねた

「うんうん、確かにそう思うよね！

でもね、そんなことはないんだよ！

お兄ちゃんでは確かに認識することができないけど、

お兄ちゃんにあげた腕時計を付けていれば認識できるようになるんだ

よ！

まあ、アテネお姉ちゃんやヴィーはデータがあるから付けなくても分かるんだけどね！

腕時計については、アテネお姉ちゃんからある程度の説明があったと思うんだけど

お兄ちゃんの識別も可能だからヴィーナスに近づいたら分かるようになっていんだよ。もちろん、腕時計機能もついているからね！」

ヴィーは嬉しそうに話す

「マスターには主な機能のみしかお話していませんが付属機能も色々ついております。ヴィーが話した機能もごく一部分と置いていただいて問題ありません」

ヴィーに続けるようにアテネが話しかけた

「なるほどね・・・すごく便利なんだ。ありがとうな！」

和也は嬉しそうに時計を見ながら答えた

「この要塞はステルスシステムが搭載され起動しているけど、実際に外からみたら、ヴィーナスの外装は山にしか見えないんだよね！」

ヴィーナスを覆うように木や草などが生えさせているからね！」

ヴィーはヴィーナスの外部分の話をした

「え？水とかないのに木や草とか生えてるの？」

和也は疑問に思いつ話を続けた

「ヴィーナスではEDKの生産を行う事が出来るんだけど処理（分解）の際に色々物ができるだよ！もちろん、その物の中には水も含まれるからね！」

その水を使って食料の生産とかしているんだけど、それでも水が余っちゃうんだよ！」

だから、余った水を外に出すようにしてるんだけど、ただ、出すだけじゃ勿体ないからね！」

その水を使ってヴィーナスの外部分に植物を育てているんだよ！それを応用すればステルスシステムだけに頼らないで視覚から見ても山にしか見えないってわけなんだ！」

ヴィーは得意げに話した

「本当にすごいな！！じゃあ、この要塞は動くみたいだから外から見たら動く山みたいなんだね！！」

要塞・・・いや、山が動くなんて！男のロマンを感じるな！！」
和也はすごく興奮して話した

「それ以外にも色々な効果があるんだよ！

ヴィーナスを外環境から守る為に植物を育ててるっていうのもあるんだけど・・・」

ヴィーは効果について話を続けた

「どんなものから守るのかな？」

和也は疑問をヴィーに聞いた

「そうだね！！たとえば、生き物の糞やナマリ茸など金属には悪いものを防ぐことができるんだ！！」

まあ、なくても金属疲労はしないようになってるんだけどね！」

ヴィーは話を続けた

「なるほど・・・金属の疲労を防ぐ事も出来るのか・・・でも、もしも、外部から攻撃を受けた際は大丈夫なのかな？」

和也はヴィーに尋ねた

「もちろん、それも問題ないよ！！」

外部にはダイヤモンドを主とした合金を使用しているからね！

大砲やレーザー兵器などの、ありとあらゆる兵器から攻撃を受けても傷一つ付く事ができないよ！！しかも、リフレクトコーティングが

施されているから、レーザー兵器や弾丸などは全て反射しちゃうからね！！」

ヴィーは自慢げに話した

「それって、無敵じゃないのか？？まったく弱点ないじゃん！！」
和也は驚きながら話した

「うん！！ヴィーナスに死角なしだよ！！」

常に新しい技術を研究して取り入れているからね！！

ヴィーナス内は外の世界と比べると技術格差がすごくあるんだよ！」

ヴィーは自慢げに話した

「なるほどな。この要塞はヴィーとアテネのおかげで成り立っているんだな」

和也は感心して答えた

「そうです。マスターを守る為ですから手を抜く事などありえませんが。」

私はマスターの事しか考えられませんから」

アテネは和也に迫るように答えた

「そ、そう、あ、ありがとう」

和也はアテネの顔が近づいた来た為、赤面しながら答えた

「あー！お兄ちゃんの事を考えて行動してるのは

アテネお姉ちゃんだけじゃないんだから！！」

ヴィーは頬を膨らませながら言った

「もちろん、ヴィーにも感謝してるよ。ありがとうな」

和也はヴィーの頭を撫でた

「むゆ……うゆ……」

アテネはすごく気持ちよさそうに目を閉じて声を出した

「マスター、そろそろ外の景色を確認した方がよろしいのではないのでしょうか」

アテネが和也に声をかける

「確かに、説明を聞いてけど実際にはまだ確認してないからね。

どんな感じなのかこの目で確認しないと」

和也は思い出したように話し、ヴィーの頭を撫でるのをやめた

「あ……」

ヴィーは残念そうに和也を見つめる

「???どうしたの??ヴィー??」

和也は疑問に思いヴィーに尋ねた

「なんでもないよ!!お兄ちゃん!!」

外の様子が見たいんだよね??」

ヴィーは慌てて和也に話しかけた

「うん、お願いできるかな??」

ヴィーに和也がお願いをする

「わかった！お兄ちゃんの頼みだもん！もちろん、叶えちゃうよ！
では、前方のシャッターを開けるから下がってね！」

ヴィーは和也とアテネにそう声をかけた

『ウィーン』と音がしてシャッターが開いた

「こ、これは・・・」

和也は外の景色をみて驚きの声をあげたのだった。。。

第8話「この要塞すこくない？」（後書き）

今回は誤字がたくさんあるかもです・・・

申し訳ないです。

次回でやつと外だ・・・

長くてすみません・・・

あ、感想あればお願いします。モチベーションが上がるので・・・

第9話「外の景色はすごくない？」（前書き）

なんとか、書けました。

いやいや、外に出れない・・・

説明ばかりですみません。

第9話「外の景色はすごくない？」

「お兄ちゃん、どうしたの??」

ヴィーは驚いている和也に問い掛けた

「い、いや・・・外がこんな状態だとは

さすがに思わなかったから・・・」

和也はヴィーの話を啞然とした状態で答えた

「マスターが思っている以上に、ジャステイスの攻撃は苛烈でした。現状ですと砂漠が大陸の5割を占めております。

マスターが今見えています景色が

普通の状態だと思っただいて問題ありません」

アテネは淡々と和也に話しかけた

「そうなんだ・・・5割か・・・」

全ての大陸が砂漠って訳ではないんだね。

ならば、自然もないわけではないのか。

でも、聞く限りじゃ人が住むに適した土地は少ないんじゃないかな

？」

和也はアテネに質問をした

「ジャステイスが開発した生物兵器や

環境に適用する為に遺伝子操作で生まれた人類が

自然を管理している為、まったくないわけはありません。

また、人が住む場所では、基本的にオアシスや井戸がありますので

水の確保と自然の維持はできているようです」

アテネは和也の疑問に答えた

「なるほど・・・ないわけではないのか・・・」

あれ？今、会話にでてきた遺伝子操作で生まれた人類って

初めて聞くけど、それはなにかな？」

和也はアテネにさらに質問をした

「ジャステイスからの攻撃に既存の兵器だけでは

対抗できないと上層部は考えたようです。

そこ攻撃に対抗する為に、人間とアンドロイドだけではなく遺伝子操作で色々な種族を生み出しました」

アテネは和也の説明に答えた

「ふむ・・・どんな種族がいるのかな？」

和也はアテネに尋ねた

「そうですね・・・代表的な種族ですと獣人になります。

人間の遺伝子と動物の遺伝子を掛け合わせる事により開発されました。

人間に比べれば、全体的な身体能力が高いのが特徴です」

アテネが和也の質問に答えた

「なるほどね・・・会ってみたいね・・・獣人啊・・・」

和也はしみじみ答えた

「うんとね！お兄ちゃんには外に行ってもらうつもりだから

きつと、会うことができるよ！！」

ヴィーが和也にそう伝えた

「え？外に俺が行くの？何でかな？」

和也はいきなりの事に戸惑いながら答える

「お兄ちゃんには説明したと思うけど

このヴィーナスはお兄ちゃんの為に

作られたという話をしたよね！」

ヴィーは和也に尋ねる

「ああ、それは聞いたよ」

和也は答えた

「現在、ヴィーナスにはアテネお姉ちゃんと

ヴィーも含めてアンドロイドしかないんだよ！

これだとヴィーナスを維持する事はできるんだけど、

ジャスティスに対して攻撃を仕掛けるには戦力不足なんだよね！

確かに、アンドロイドを増やせば何とかなるかもしれないけど

やっぱり、人間あってこそその世界だからね！

お兄ちゃんも一人だけ人間では色々とおもっただい！

それに佐代子様が『和也が目を覚ましたら信頼できる仲間を探すよ
うにね』

と伝えるように言われていたからさ！」

ヴィーは和也に話した

「確かに、俺だけが人間だと色々あるかもな・・・」

和也はヴィーの話に答えた

「マスターは私が信頼できないんですか？」

アテネは涙を潤ませながら和也に問い掛けた

「い、いや！そんな事は絶対じゃないよ！

アテネやヴィーはすごく信頼できるけど、

人は多いに越した事はないからね！」

和也は慌ててアテネに話しかけた

「そうですか。マスターに信頼されているのなら良いのです」

アテネは笑顔で答えた

「うーん、あれ??でもさ、俺が外にでなくても

要塞が移動する事ができるんだから、

そのまま移動すれば良いんじゃないかな？」

和也はヴィーに質問をした

「それができればよいんだけど・・・お兄ちゃん・・・ごめんね。

ヴィーナスを動かすには、今の人員と材料じゃあ全然足りないんだ
よ！」

それに、すごく大きな問題があるよ！

この巨大な要塞がシティに近づいたら

ジャステイスの新兵器化と思われる攻撃をしてくるかもしれないん
だよ！」

ヴィーが和也の質問に答えた

「確かに、超巨大要塞って言うぐらいだからね・・・

山が動いてきて接近してきたら、ジャステイスの新兵器化と
思われても仕方ないか・・・」

和也は納得して話した

「それに、お兄ちゃんが目覚めるまでの間、

ジャステイス以外で新兵器って開発されていないからね」
ヴィーが続けるように話した

「そうか・・・これだけ荒れ果てていたら開発する事もできないか」
和也は納得するように話した

「その通りだよ！だから、ヴィーナスではシティに近づく事ができないんだ！

まあ、材料が足りないからどちらにしても移動することができないけどね！」

ヴィーは和也に話しかけた

「ふむふむ・・・なるほどね・・・

じゃあ、どうやって俺はシティとかに行けばよいのかな？

まさか・・・徒歩って事はないよね？」

和也はヴィーに尋ねた

「ははは！お兄ちゃん面白い事いうね！！

そんな事したらお兄ちゃんが死んじゃうよ！

もちろん、お兄ちゃんにそんな無理をさせない為に

移動手段はちゃんと用意してある！」

ヴィーは得意げに話した

「よかった・・・さすがに徒歩でこの世界を歩くのはきついからね」

和也は安堵しながら話した

「それは、どんな移動手段かというとね！！

ジャジャーーン！ヴィー特性のお兄ちゃん専用戦車を作っているよ！

車庫に行ってもらえれば見れるからね！！」

ヴィーはさらに得意げに話した

「なるほどね。戦車か！軍事訓練と演習以来だな！

しかし、楽しみだな！！本当に久しぶりだからな！

でも、操縦とかは大丈夫かな？一般的な戦車に関しては

訓練や実施でやったことがあるけど・・・」

和也は楽しそうに答えながら疑問を口にした

「マスター、操縦に關しましては私が同行する為、特に問題ないかと思われませぬ。」

また、操縦も既存の戦車と変わりませんので問題ないかと思ひます
和也の質問にアテネが答えた

「そうか！なら問題ないね！アテネは俺と一緒に行くか！ヴィー
はどうするのか？」

和也はヴィーに尋ねた

「ヴィーはヴィーナスの管理と守護があるからいけないんだよ！

お兄ちゃんがママに帰つてきてくれると嬉しいな！」

ヴィーは和也の質問に答えた

「なるほど！分かつたよ！ヴィーナスにはママに帰るようにするな！
しかし、それだとアテネと二人旅になるのか・・・」

和也は力強く答えた

「マスターは私と二人は嫌ですか？」

アテネは上目遣いで和也に尋ねた

「そ、そんな事ないよ！アテネがいてくれて心強くなって思うよ！

アテネには色々と苦労をかけるかもしれないけど、よろしくね！」

和也はアテネに頭を下げた

「私はマスターの為だけに存在しております。苦労などありません。

いえ、あるはずがありません！そう！マスターあつての私です！！」

アテネは自分の世界に入り一人で語り続けた

「あ、ありがとう。アテネがいてくれると本当に助かるよ」

和也はちよつと引きながら答えた

「じゃあ、お兄ちゃん！車庫に行こうか！戦車を見せてあげるね！

お兄ちゃんの用意ができたなら出発してもらわないといけないしね！」

ヴィーは二人の会話に割つて入り話した

「あ、そうだね！じゃあ、車庫に案内してもらえるかな？」

和也はヴィーにお願いした

「うん、お兄ちゃん、分かつたよ！アテネお姉ちゃんも車庫に行く

よ！」

ヴィーはアテネに話をふって和也と歩き始めた

「あ、マスター！ヴィー！待ってください！！！」

アテネはヴィーと和也を追いかけて車庫へ移動をはじめた

第9話「外の景色はすこくない？」（後書き）

次回は戦車の登場！！

要塞が超巨大なんだから、もちろん戦車は・・・

楽しんでもらえてるのか心配です・・・

感想など頂けるとモチベーションがあがるので
よろしくお願い致します。

あ！ちなみに、良い戦車名も募集しております。

超巨大戦車予定、メイドイン日本なので日本名で
募集します。良い名前が採用したいと思います。

ちなみに主人公の戦車で採用されなくても

本文中に入れる可能性があります！オリジナルって良いですよね！！

12/20 修正 黄金拍車 様 ありがとうございます

第10話「戦車なのに戦艦みたいじゃない？」（前書き）

遅れて申し訳ないです。

募集事項を削り、本編を投稿します。

戦車の名前を送って頂いた方、ありがとうございます。

参考にさせていただきます。

では、本編をどうぞ！

第10話「戦車なのに戦艦みたいじゃない？」

「お兄ちゃん！！ここが車庫だよ！！」

ここにお兄ちゃん専用戦車が作ってあるよ！！」

ヴィーは扉の前で嬉しそうに語った

「そうか！！ここにあるのか！！どんな戦車なんだろう・・・」

和也はドキドキしながらドアを見つめる

「マスター、扉にお入りください」

アテネが和也にドアに入るように促した

「で、では、入るぞ・・・」

和也はドキドキしながらドアの前に立ち

プシューという音と共に中へ入った

「あれ??真つ暗で何も見えないじゃないか・・・」

ヴィー、電気をつけてもらえるかな？」

和也はヴィーをお願いをした

「あ、ごめんね！！電気つけるの忘れてた！！」

ヴィーはぺろりと舌を出し、可愛く笑った

「では、改めて！！お兄ちゃん、覚悟は良いかな？」

電気をつける前に、カウントダウンをするね！！

さて・・・3・・・2・・・1！！ジャジャアーン！！」

ヴィーはカウントダウンを行い電気をつけた

「おお！！こ、これが俺専用・・・」

和也は目の前に広がる金色に輝く塊を見つめた

「な、なんか、すごく大きくないか??」

それに、これって戦車なんだよね？

戦艦ではないんだよね??

色も金色なんだけど・・・」

和也はあまりの大きさと輝きに目を大きくした

「うん！！これは戦艦ではなくて、

お兄ちゃんの為に作った専用の戦車だよ!!

まあ、こんなに大きな戦車は今までなかったと思うけどね!」

ヴィーは自慢げに胸を張り和也の質問に答えた。

その際に胸がぷるるんと揺れる

「そ、そうだよね・・・」

お、俺もこんなに大きな戦車は初めて見たよ。

しかし、想像していた戦車よりもはるかに

大きいからすごくびっくりした・・・」

和也は揺れた胸を見てしまい赤面しながら目をそらした

「これは、お兄ちゃん専用戦車だからね!!」

今までにないような物を全て詰め込んだんだ!

ヴィー、すごく頑張っちゃったよ!」

ヴィーは和也の赤面した顔に気がつかずに自慢げに話した

「ありがとうな、ヴィー!

そういえば、この戦車に名前はないのかな?」

和也は疑問に思った事をヴィーにたずねた

「名前?まだ、できたばかりだから決まってるないよ!

お兄ちゃんが乗る戦車だから

できれば、お兄ちゃんに考えてほしいな!!」

ヴィーは和也の質問に答えた

「まだ、決まってるいないのか・・・」

うーん、どんなのが良いかな・・・

こんな世界だしな・・・」

和也は目を瞑り考え始めた

「ふむ・・・よし!決めた!!」

これから全てがここから始まると考えて、

始まりの神である『三柱の神(造化の三神)』になぞらえる事にし

ようかな。

尚且つ、ヴィーという可愛い子が作った事をふまえて

『カミムスビ』なんてどうだろうか?

三柱の神の中では唯一の女神だしね！」

和也はヴィーに提案した

「ヴィーが可愛いだなんて！！ありがとう！！お兄ちゃん！！」
ヴィーはテレながら答えた

「ヴィーが可愛いって思うのは当たり前前的事だよ！」

和也はヴィーにその声をかけて頭をなでた

「むゆ・・・うゆ・・・」

アテネはすごく気持ちよさそうに目を閉じて声を出した

「マスター、可愛いのはヴィーだけでしょうか」

アテネが割って入るように和也に尋ねた

「アテネは可愛いというよりも綺麗だからね。」

大人っぽいから、そう思うのかも知れないけどさ」

和也はアテネの問いに答えた

「綺麗ですか・・・マスター、ありがとうございます！」

マスターにそう言って頂けると大変嬉しいです！

私はマスターにどこまでもついて行きます！！！」

アテネは自分の世界に入り一人で語り続けた

「そ、そう・・・あ、ありがとう・・・」

と、ところで戦車の名前は『カミムスビ』で良いかな？」

和也はアテネの答えにびっくりしながら、ヴィーに質問をした

「うん！！お兄ちゃんが考えた名前前で登録するね！！！」

ヴィーは嬉しそうに和也に答え、データを入力していく

「ま、まさか、また粘膜登録とかないよね？」

和也はヴィーに戸惑いながらたずねた

「それは大丈夫だよ！」

カミムスビにはアンドロイドを乗せてないからね！

戦車の官制AIを乗せているだけなんだよ！

本当ならアンドロイドを乗せたかったんだけど

ヴィーナス開発を優先的に行っているから

材料が足りないんだよ。だから、お兄ちゃんが外で

たくさん材料を集めてもらえれば配備できると思うよ！」

ヴィーは和也の質問に答えた

「なるほどね・・・でも、感情回路がない機械だと
ジャステイスに制御されちゃうんじゃないのかな？」

カミムスビが敵に制御されたら何もできなくなるよ」

和也はヴィーに疑問を尋ねた

「あ、お兄ちゃんに言うの忘れちゃってたね！」

ジャステイスの暴走が行われてすぐに、

各国がその攻撃から身を守るうと

外部からのアクセスが出来ない兵器や

ブロックシステムが開発されたんだよ！

これによって制御されない、さまざまな兵器ができたんだよ！

ただ、人が乗らないと動かす事が

出来ないっていう難点があるんだけどね！

それが開発されたからこそ、

軍部はそれを使って敵と戦う事が出来ていたんだよ！

まあ、今はハンター協会が戦っているんだけどね」

ヴィーは和也の質問に答えた

「なるほど・・・そういう物が開発されていたのか・・・

確かに、それがなかったら生き残りなんていなかったよな・・・

自動で操る事が出来ないっていうのは難点だけどね・・・」

和也はしみじみ答えた

「確かに自動で操る事は出来ないっていうのは大変だと思うけど、

兵器を牽引する事が出来るし、アンドロイドも制御を奪われない

処置を行えば戦うことが出来るからね！

感情回路がついているアンドロイドは処置さえいらさないけどね！」

ヴィーは和也の疑問に答えた

「なるほど・・・すごいな・・・

でも、そこまで出来たのに勝利する事ができなかったの？」

和也はヴィーに疑問をたずねた

「お兄ちゃんの疑問はもつともだね！」

アメリカの軍部を統括していたジャステイスは
すぐに材料や鉱石などを抑えて

兵器の生産を開始して攻撃を続けたいよ！

材料や鉱石などがなければ何も作れないからね！

その当時はアメリカが一番強かったから止める事ができなかった
みたい！

ジャステイスに対抗しようと各国が協議しても

中国やロシアが自国の軍事技術が知られたくないとか

駄々をこねて各国の足並みを揃える事が出来ずに、

まとまって攻撃をする事ができなかったみたいだよ！」

ヴィーは和也の質問に答えた

「まあ、確かにまとまってあたるか出来なそうだよな。

あの国はいざと言う時、そういう行動をとりそうだったし」

和也はしみじみ答えた

「うんうん、まあ、それで混乱が広がって

前に説明したようになったところだよ！」

ヴィーは和也に話した

「まあ、仕方ないか・・・そういえば、カミムスビに関しての

性能とか聞いてないけど、どんな感じなのかな？？」

和也は前の話を切ってから、ヴィーに質問をした

「ふふふ！知りたい？？お兄ちゃんの為に作った

この『カミムスビ』の性能を！」

ヴィーは胸を張って話した。その際に胸がぶるると揺れる

「し、知りたいな！う、うん、知りたい！！」

和也は揺れた胸をまた、見てしまい赤面しながら話を続けた

「??？お兄ちゃん、どうしたの？顔が赤いよ??？」

ヴィーは和也の様子を見て尋ねた

「な、なんでもないよ！！ただ、カミムスビを見て興奮してるだけ
だよ！」

和也はなんとか誤魔化そうとヴィーの質問に答えた

「なるほど！！確かにカミムスビはすごい存在だからね！
では、待ちに待った『カミムスビ』の性能について話すね！」
ヴィーは自慢するようにさらに話を続けようと口を開いた

第10話「戦車なのに戦艦みたいじゃない？」（後書き）

遅れて申し訳ないです。

神様の名前が多かったのをふまえてこの名前に決定しました。
ヴィーナスが女性名なので、

戦車も女性名が良かった為のこうなりました。

新キャラは出していませんが、フラグは出てますよね？

人間とか出す前に女性が増えてきたような・・・

感想をいただければと思います。

作者のモチベーションが上がるのでお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1544z/>

熱砂の超巨大移動要塞ヴィーナス

2011年12月24日12時53分発行